



トランスジェンダー生徒のジェンダー葛藤と性別移行をめぐる実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土肥, いつき メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017264

<論文要旨>

トランスジェンダー生徒のジェンダー葛藤と性別移行をめぐる実践

土肥いつき

本論文の目的は、第1にトランスジェンダー生徒の性別違和が学校文化の中で強められる過程を通して、学校の性別カテゴリーが構築される過程を明らかにすること、第2にトランスジェンダー生徒がおこなう実践とは、学校文化の中でつくられた性別カテゴリーの再構築であることを明らかにすることである。

これまでのトランスジェンダー生徒は、配慮や支援あるいは医療行為をうける客体ととらえられてきた。それに対して、本論文ではトランスジェンダー生徒を、行為主体ととらえる。このようにとらえることで、トランスジェンダー生徒の感じる性別違和や、性別移行をおこなう実践過程で、学校の中にある性別カテゴリーの存在を顕在化させる存在となる。その際、これまで日本においてなされてこなかった教育社会学におけるジェンダー研究との接合を試みる。

第1章「トランスジェンダーをめぐる歴史と変遷」では、本論文の背景となるトランスジェンダーをめぐる歴史を明らかにした。中世から近世の西洋社会においては、性別移行や同性愛といった行為は秩序を乱す「逸脱」とされ、宗教的な罪、あるいは犯罪行為としてとらえられる一方、「逸脱」により「正常なセクシュアリティ」が構築されていた。近代になると、トランスジェンダーや同性愛者を「病理」ととらえ、研究や治療の対象とした。1960年代以降、当事者により脱精神病理の運動が起こり、現在は人権課題としてとらえられるようになった。一方、日本においては1990年代後半に大学病院などで「性同一性障害」治療がおこなわれるようになり、病理化が進んだが、2015年以降、脱精神病理が意識されるようになった。

第2章「先行研究の検討と本論文の分析視角」では、トランスジェンダー生徒についての先行研究の検討をおこなった。先にも述べたように、日本においてもトランスジェンダーの脱精神病理が意識されはじめているが、トランスジェンダー生徒については、身体の性別と性自認の違和によって学校生活に困難をきたしており、その困難の解消のために必要な支援をするという病理的なアプローチが主流である。一方、教育社会学におけるジェンダー研究では、2000年以降、ロバート・W・コンネルやジュディス・バトラーなどを用いたフェミニズムポスト構造主義の影響を受けるようになり、子どもたちの実践による性別カテゴリーの構築過程を明らかにする研究がされるようになってきた。本論文は、第1章で示された脱精神病理の文脈に立ちながら、近年の教育社会学におけるジェンダー研究の成果の上に分析をおこなうものであることを示した。その後、分析をおこなう際に用いる3つの言葉を定義した。まず、学校の中にある性別に基づく扱いの差異によって、2つの性別カテゴリーが構築される。これを「性別分化」とした。性別分化の過程で、生徒たちを出生時に割り当てられた性別 (Assigned Gender At Birth 以下, AGAB) へと水路づける

強制力が働く。この強制力を「AGABの強制力」とした。トランスジェンダー生徒は、自認する性別とAGABの強制力の迫間で葛藤を抱える存在とし、この葛藤を「ジェンダー葛藤」とした。また、本論文では性別カテゴリーを扱うため、カテゴリーと境界線についての先行研究を参照して、本論文の分析視角を示した。

そのうえで、本論文の目的に照らし、境界線の設定による性別カテゴリーの構築過程と、その性別カテゴリーへの割り当ての過程を、トランスジェンダー生徒がジェンダー葛藤を強める過程を通して分析するとともに、ジェンダー葛藤軽減の実践を分析することとした。

第3章「学校の性別分化とトランスジェンダー生徒のジェンダー葛藤」では10人のトランスジェンダーへのインタビューをおこない、学校の制度による性別分化がジェンダー葛藤を強めていく過程と、教員へのカミングアウトを転換点としたジェンダー葛藤軽減の過程を分析した。幼稚園・保育園から小学校低学年では、保護者と学校の共同作業としての性別分化がジェンダー葛藤を引き起こす。小学校高学年では制度的な性別分化が顕在化しはじめるだけでなく、いじめに代表される生徒間の相互行為による性別分化も見られ、これらがジェンダー葛藤を強めていく。中学校では制度的な性別分化が強まる。中学時代の性別分化は、「ありたい性別」とは異なる人間関係に自らをカテゴライズしなくてはならず、このことがジェンダー葛藤を強める要因になる。

このように強められたジェンダー葛藤に対して、トランスジェンダー生徒は「言語化」「ロールモデルとの出会い」を通して、ジェンダー葛藤解決の道筋として「カミングアウト」という行為を見つける。カミングアウトが成功するためには、性別扱いの変更を要求することが可能であること、要求の課題を発見し続けること、変容する他者が存在することの3つが重要であることが明らかになった。そしてこれらは相互に関連をしていた。

以上のことから、トランスジェンダー生徒のジェンダー葛藤は性別分化の中で強まること、またジェンダー葛藤の軽減は、トランスジェンダー生徒の変容と他者の変容の相互行為の中で実現されていくことが明らかになった。

第4章「トランスジェンダーによる性別移行をめぐる日常実践」では、第3章のインタビュー対象者のうちのひとりである、トランス女性Aへの追加インタビューをおこない、AGABの強制力が変化中、外見や振る舞いを変えた時の教室内の所属グループや他者からの性別の扱いの変化を分析した。

保育園や小学校低学年ではAGABの強制力が弱く、性別の境界線があいまいだった。そのため、Aは女子としての振る舞いを通して女子カテゴリーの成員とみなされた。中学校ではAGABの強制力が制度として強まるとともに、子どもたち自身も強固な性別カテゴリーを構築し、性別カテゴリーの境界線も明確化した。そのため、性別カテゴリー内の移動の自由度がほとんどなくなった。高校においてもAGABの強制力は存在したが、制度から選択へと移行することで制度的なAGABの強制力は弱まった。Aは男子カテゴリー内にとどまりながら、「男の端の端」へと移動し、他の男子生徒との差異化をはかった。さらに腐

女子を実践することで、性別カテゴリー内の位置どりを換え、他の腐女子の承認のもと、女子カテゴリーのサブカテゴリーである腐女子カテゴリーに自己執行 (Sacks 1979=1987) した。

以上のことから、次の3点が明らかになった。第1に、Aがおこなった外見や振る舞いを変える実践は、性別カテゴリー内の位置どり（教室内の他の女子／男子との距離）を変える行為であるということ。第2に、性別の位置どりの変化に対する他者の承認のもと、Aによる性別カテゴリーの境界線の再設定により、他者からの性別の扱いが変化すること。第3に、教室内に働くAGABの強制力が、性別カテゴリー内の位置どりの自由度だけでなく、性別カテゴリーとAGABの結びつきや性別カテゴリー間の境界線の自由度にも影響を与えていたこと。

これらのことから、Aによる日常生活場面における性別移行の実践は、Aが性別カテゴリー内の他者との相対的な性別の位置どりを換えるとともに、性別カテゴリーの境界線の再設定を他者から承認されることを反復するという相互作用の中で、成立する行為であったことが明らかになった。

終章「トランスジェンダー生徒のジェンダー葛藤とバウンダリー・ワーク」では、本研究の知見を整理した後、総合的な考察をおこなった。考察に先だて、以下の2点を確認した。第1に、言説において性別カテゴリー間に境界線を設定することにより、2つの性別カテゴリーが構築されることが「性別分化」であること。第2に、境界線の設定により構築された2つの性別カテゴリーのうち的一方であるAGABにしたがった性別カテゴリーへと割り当てる強制力が「AGABの強制力」であること。

以上を踏まえて、まず、第1の目的である、性別カテゴリーの構築過程を明らかにするために、インタビューの中から「服装」や「場」にかかわる語りを取り出し、考察をおこなった。服装の選択や制服の着用、あるいは「場をわける」という行為により境界線が設定され、二分法的な性別カテゴリーが構築されていた。さらに、性別カテゴリーと結びついた行為によってトランスジェンダー生徒をAGABにしたがった性別カテゴリーへと割り当てていた。このようなAGABにしたがった性別カテゴリーの割り当てが、トランスジェンダー生徒のジェンダー葛藤につながっていたことが明らかになった。

続いて、第2の目的である、トランスジェンダー生徒がおこなう実践とは、性別カテゴリーの再構築であることを明らかにするために、トランスジェンダー生徒が境界線を再設定する行為である「バウンダリー・ワーク」について考察をおこなった。トランスジェンダー生徒は、まず性別カテゴリー内の他の成員との差異化をはかり、続いて性別カテゴリー内のジェンダー構造を利用して他の成員との間に境界線を再設定し、それが他者から承認されることで、あらたな性別カテゴリーを構築していた。さらに、その性別カテゴリーに割り当てる優先権を獲得することで、あらたな性別カテゴリーに自己執行し、性別移行を達成していたことが明らかになった。

このようなトランスジェンダー生徒による実践は、性別カテゴリー内のジェンダー構造を用いているため、それらを維持・強化するものと言える。しかし一方で、性別カテゴリーの意味あいを変えたり二分法的な性別カテゴリーでありながらも境界線を再設定するという行為は、ある種の「攪乱」(Butler [1990] 2000=1999) ともいえるだろう。